

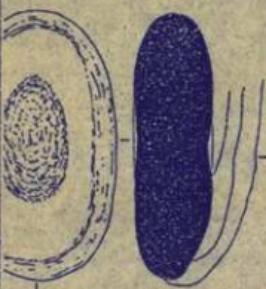
HAKA TA
博 多 IX

—博多遺跡群第30次調査の概要—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第149集

1987

福岡市教育委員会

博多 IX 正誤表

頁	行	誤	正
本文	9	(1)弥生時代の遺跡と遺物	(1)弥生時代の遺構と遺物
目次	12	(3)近世の遺構と遺物	(4)近世の遺構と遺物
3 ~6	32 -1	大友・龍造寺の戦い、天 の戦い、天正11(1583)年	大友・龍造寺の戦い、 天正11(1583)年
8		SK 97	SE 97
12			
30	32	資料係長	資料係長

NO.14338

HAKA TA IX

—博多遺跡群第30次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第149集



1987

遺跡調査番号 8605
遺跡略号 HKT30

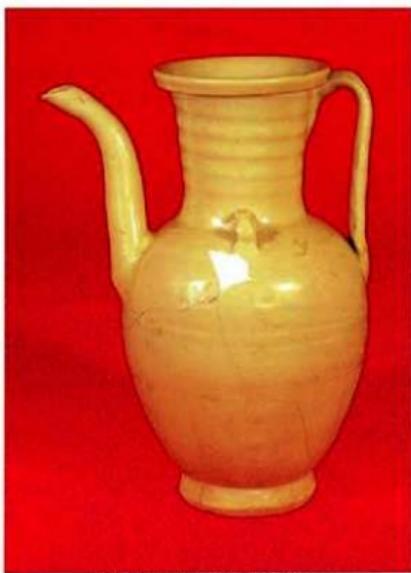
福岡市教育委員会

卷頭図版 1



SC 89号 弥生時代中期竪穴住居

卷頭圖版 2



SK 71号 土壤出土白磁水注

序

現在福岡都市圏の窓口として市街地の再開発著しい旧博多区は、古代から中世にかけて对外貿易の一大拠点として歴史の舞台を飾った地域でもありました。

本書は昭和61年度に行なった民間開発にかかわる第30次調査の概要を収録したものです。中世都市「博多」を物語る多人な資料のはか、さらに遡って弥生時代中期の同地域では最古の住居跡を検出するなど、貴重な資料が得られております。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術研究の場で活用されることを切に願っております。

調査に際し御協力御指導を賜わりました方々に心より感謝の意を表します。

昭和62年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が1986年度に実施した博多遺跡群第30次調査の概要である。
2. 発掘調査は常松幹雄、加藤良寧が担当した。
3. 本書に掲載した遺構番号はすべて通し番号であり、SD：溝、SE：井戸、SK：土壙の略号である。
4. 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とした。
5. 調査区内グリッド名称は方眼線の西交点とした。
6. 本書で用いる方位は真北とした。
7. 本書で用いる貿易陶磁分類は「博多出土貿易陶磁分類図」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ 博多(1) 福岡市文化財調査報告書第105集 別冊 1984年）に掲った。
8. 本書に掲載した遺構実測図は、常松、加藤のほか、中登志之（現福岡市博物館準備室嘱託）、池田裕司（九州大学学生）、汐崎美紀・陳雅攷・宮崎由美子（以上西南学院大学学生）、前田直子（九州大学聽講生）による。
9. 遺物実測図は、常松、加藤、池田のほか、荻村昇二・小川泰樹（明治大学学生）、永瀬昭子（熊本大学卒）による。
10. 本書に掲載した写真は常松、加藤のほか、白石公高による。
11. 本書の執筆編集は常松の協力を得て加藤が行なった。

本文目次

I. 調査に到る経緯

1. 調査に到る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査経過	2

II. 博多遺跡群第30次調査の概要

1. 遺跡の位置と環境	3
2. 調査の概要	6
(1)弥生時代の遺跡と遺物	10
(2)弥生終末～古代の遺構と遺物	20
(3)平安末～中世の遺構と遺物	21
(3)近世の遺構と遺物	29

III. まとめ	30
----------	----

遺構一覧表	31
-------	----

挿図目次

図1 調査区免掘風景	2
図2 博多遺跡群調査区位置図 (1 : 10,000)	4
図3 博多遺跡群第30次調査区の位置 (1 : 1,000)	5
図4 妙楽寺・永寿院附近古絵図	6
図5 調査区上面遺構全景	7
図6 調査区下面遺構全景	7
図7 博多遺跡群第30次調査区上面遺構全体図 (1 : 100)	8
図8 博多遺跡群第30次調査区下面遺構全体図 (1 : 100)	9
図9 S C89号堅穴住居跡完掘状況	10
図10 S C89号堅穴住居跡 (1 : 40)	11
図11 S C89号堅穴住居跡出土遺物(1) (1 : 2)	12
図12 S C89号堅穴住居跡出土遺物(2) (1 : 4)	13

図13 S C89号堅穴住居跡出土遺物(3) (1 : 4)	14
図14 S C89号堅穴住居跡出土遺物(4) (1 : 4)	15
図15 S C89号堅穴住居跡出土遺物(5) (1 : 4)	16
図16 支脚46	17
図17 支脚46タキ痕	17
図18 弥生時代のその他の遺物 (1 : 4, 58・59のみ1 : 2)	19
図19 弥生終末～古代の遺物 (1 : 4)	20
図20 S D100・101号溝出土遺物 (1 : 3)	21
図21 S E43号井戸 (1 : 50)	22
図22 S E43号井戸掘方断面	22
図23 S K71号土壤 (1 : 30)	23
図24 S K9号土壤 (1 : 20)	24
図25 S K9号土壤全景	24
図26 S K9号土壤遺物出土状況	24
図27 S K71号土壤出土遺物 (1 : 3, 75のみ1 : 4)	25
図28 S K9号土壤出土遺物 (1 : 3, 79・84のみ1 : 1)	25
図29 墨書き器	26
図30 軒丸瓦	27
図31 軒平瓦	27
図32 青白磁菩薩像手	27
図33 鉄器 (1 : 4)	27
図34 瓦上	28
図35 穂杖の球	28
図36 渔撈具	28
図37 S K19号土壤一括遺物	29

I. 調査に到る経緯

1. 調査に至る経緯

博多区は昭和38年博多駅の新駅が祇園町から現在地に移転以後、九州と本州他各地とを結ぶ中枢として民間企業の高層ビル建設が相次ぎ、さらに昭和50年の新幹線乗り入れ、昭和58年福岡市高速鉄道（地下鉄）開通以後さらに重要度を増し、現在駅周辺は新社屋・支社屋等の建設テッショである。これを受け民間開発に伴う緊急発掘調査も29次にわたって行われている（昭和62年3月現在35次）。昭和60年8月22日、株式会社高木工務店より博多御供所36・37・38・39番地内におけるビル建設申請が教育委員会になされた（後に株式会社マルコーに申請者変更）。教育委員会では昭和53年及び55年に隣接地である東長寺の納骨堂・本堂建設に先立つ緊急調査を行っていた。弥生時代から中世にわたる遺構、遺物が検出されており、当該地は連続する遺跡群の存在が充分に予想された。教育委員会ではこの調査成果をもとに施主株式会社マルコー、施工業者株式会社高木工務店との協議にはいり、結果、昭和61年5月6日より本調査を行う事となった。

調査面積：495m²

調査期間：昭和61（1986）年5月8日～7月15日

2. 調査の組織

調査委託：株式会社マルコー

調査主体：福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

文化部長 河野清一

埋蔵文化財課 柳田純孝

庶務担当：飛高憲雄（第2係長）、松延好文

調査担当：常松幹雄、加藤良彦

調査、整理作業：中登志之、池田裕司、小川泰樹、荻村昇二、百武義隆、高田マサエ、松尾キミ子、松尾鈴子、倉川春江、柴田常人、山本キクノ、坂田セイ子、小林ツチエ、村田敬子、門司弘子、天野セツ子、大瀬良清子、近藤澄江、宮崎由美子、陳雅攻、小城信子、国武真理子、田中克子、沙崎美紀、小宮歩美、町居則子、嵩田貴代、前田直子、池田初美、村嶋里子、青柳美紀、奥園佳代子、水淵昭子

なお、今回の調査にあたって、施主株式会社マルコー、施工業者高木工務店には多くの御理解と御協力を賜った。記して深く感謝する次第である。

3. 調査経過

- 1986年5月8日 壱土剥ぎ及び搅乱土・近世包含層の掘削、撤出開始。
- 5月10日 遺構が不明瞭なためトレンチ設定。土層を確認し、面を決定。
- 5月15日 撤出終了。上面の遺構検出、掘削開始。
- 5月22日 ほぼ全遺構の検出を終了、実測開始。
- 5月23日 SK9号土壤より鏡片検出。
- 5月28日 遺構検出中に白磁水注出土。
- 6月11日 排土撤出。
- 6月13日 上面遺構全景写真撮影。
- 6月18日 上面での遺構実測、レベリング終了。遺構面掘削開始。
- 6月19日 下面遺構検出・掘削開始。
- 6月24日 SC89弥生堅穴住居検出。
- 6月26日 遺構実測開始。
- 7月4日 下面遺構全景写真撮影。
- 7月12日 地鎮祭
- 7月14日 遺構実測・地形測量終了。
- 7月15日 現場撤収。



図1 調査区発掘風景

Ⅱ. 博多遺跡群第30次調査の概要

1. 遺跡の位置と環境

博多遺跡群は、北を陸蟹島である志賀島と海の中道、西を糸島半島、さらに玄界島、能古島とによって囲まれた天然の良港である博多湾岸の南東部に位置する。

海岸には、湾内を巡る左転迴流と、瑞梅寺川・室見川・那珂川・多々良川などの諸河川の撒出する砂によって著しい古砂丘の発達が見られ、当遺跡群はこれらのうち、那珂川の右岸に形成された「博多浜（櫛田浜、袖の浜）」・「沖（息）の浜」と称される二つの砂丘上に立地している。図2に見ると、西を那珂川及びその支流である博多川、東を江戸初期に開削されたと伝えられる石堂川、南を石堂川開削以前南辺を西流し那珂川に合流していたと考えられる旧比恵川にと、中世末には四方を水によって区画された地域である。

このうち「博多浜」部には弥生時代中期前葉の壠塙墓が営なされており、それ以前の形成である事が知られるが、「沖の浜」部は下呂服町の第5次調査地点で地表下4.5mの位置から碇石が出土しており、古代段階までは形成途上にあった比較的新らしい砂丘であり、永仁元(1293)年成立の『蒙古襲来絵詞』下巻の詞書に「息の浜」の字句が伺え、弘安の役の年、弘安4(1281)年頃には陸化していた様である。この二つの砂丘間、呂服町交差点付近は故中山平次郎博士の論考以来、平清盛の開削により日宋貿易の拠点とされた「袖の湊」の故地と比定されているが、地下鉄呂服町工区の調査によって、開削以前の11世紀後半には既に陸化していた事が確認され、二砂丘は陸橋により連続していた事が確かめられた。現地形の等高線もこの状況を如実に示している(図2)。現在「袖の湊」は北東・南西の両側に開いた二つの低地に求められている。

「袖の湊」の一事が示すごとく、大陸と指呼の間にあるこの地は江戸幕府の領国に至るまで常に对外交渉の表玄関としての役割を果たしてきた。先に述べた様に弥生時代中期には壠塙墓群を成立させる集団となり、対岸の佐吉神社には付近から括出土したと考えられる銅矛5、銅戈6口が伝世されており、海に拠る集団の活力が推察され、4世紀末から5世紀初頭には70m級の前方後円墳を出現させるまでになっている(第28次調査)。筑紫國造磐井の反乱後の536年那の津の官家の設置以来、奈良平安時代には大宰府の要津、唯一の外港として軍事外交の基幹をなし、平安後期から鎌倉前期にかけ、居留唐・宋人の「博多大唐街」の形成、「袖の湊」の開削、聖福寺・承天寺等の禅寺の建立、13世紀末の鎮西探題の設置、室町幕府の九州探題の設置・勘合貿易の開始と、名実ともに九州の中心となる。しかし、平和裡の発展のみではなく、貞觀11(869)年新羅海賊受冠、寛仁2(1019)年刀伊の入寇、文永11(1274)年弘安4(1281)年の元寇、対内的には天慶3(940)年藤原純友の乱、永祿2(1559)年大友・惟門の戦い、永祿12(1569)年元亀2(1571)年大友・毛利の戦い、天正2(1574)年大友・龍造寺の戦い、天

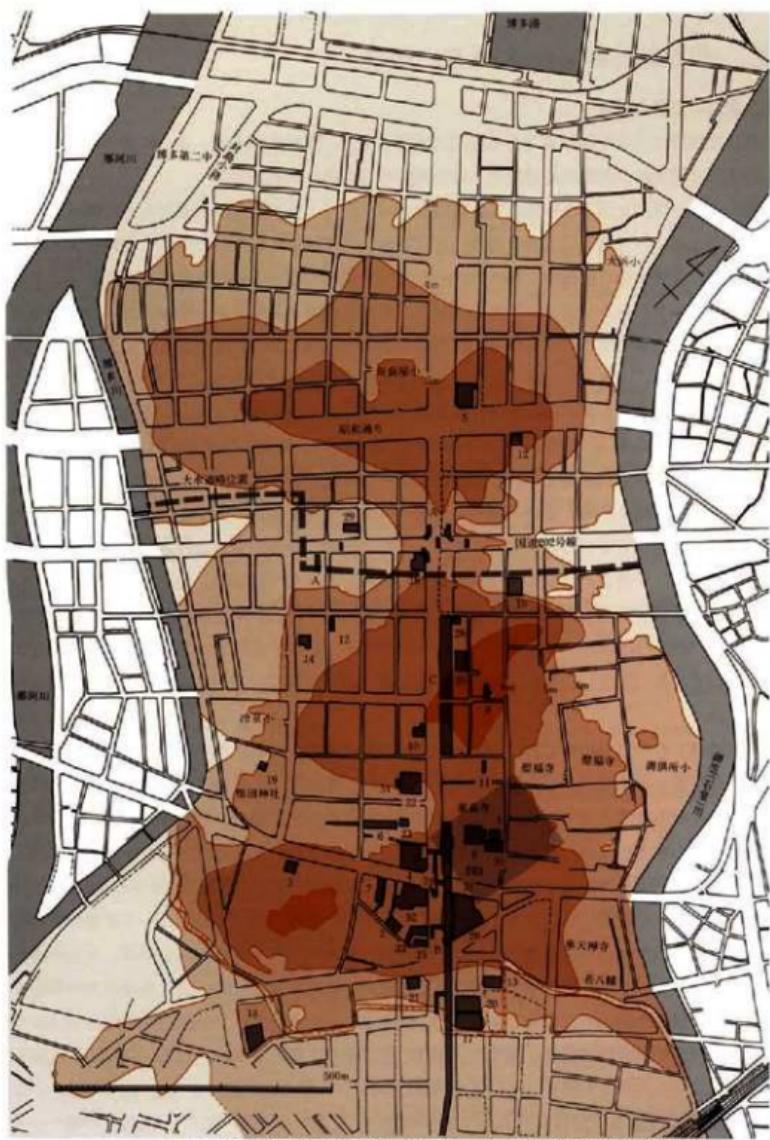


図2 博多遺跡群調査区位置図（1：10,000）数字は調査数を表す
 A…地下鉄久留米工場調査区
 B…地下鉄店舗周辺・祇園町・博多駅前工区調査区
 C…都市計画道路博多駅・篠港線拉幅調査区

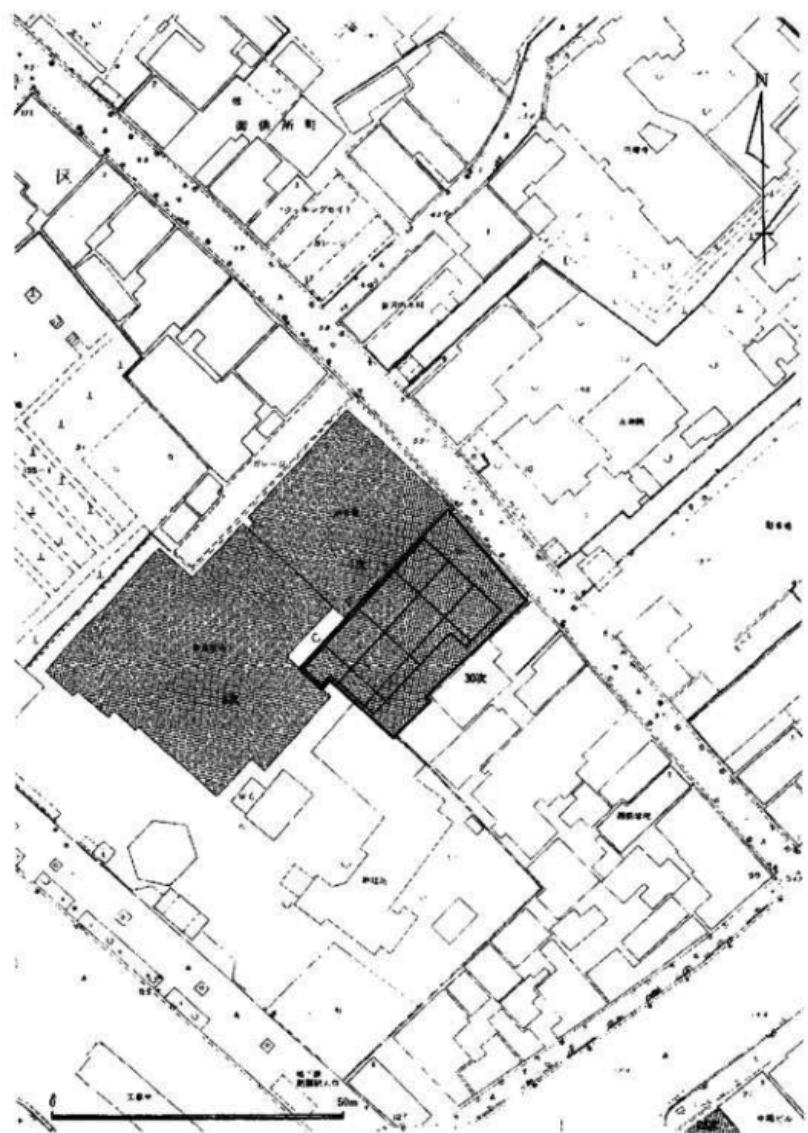


図3 博多遺跡群第30次調査区の位置 (1 : 1,000)

の戦い、天正11(1583)年大友・島津の戦いと、この地の富をめぐって繁栄と戦乱を繰り返し、天正14(1586)年島津の焼き打ちによりことごとく焼き尽くされた。しかし、天正15(1587)年島津征伐に向かう太閤秀吉によって現町割に復興され、秀吉の恩恵とも相俟って朝鮮出兵の兵站基地として往時の眼窓をとりもどすが、徳川幕府の鎮国により、国際貿易都市としての役割を長崎に譲り、「黄金の日々」に遙かに及ばぬ商業都市として明治を迎えるのである。

2. 調査の概要

調査地点は「博多浜」砂丘陵線の東部分、17世紀前半に現地に移築されたと思われる真言宗東長寺の裏手に当たる。博多遺跡群の通例で、遺構の切り合いの激しい事、遺構覆土と周囲の土との差異が少なく判別が困難である事、さらに加えて上部からの生活排水工場排水の浸み込みにより上部での遺構検出ができず、最下層（標高3.1m前後）と上方20~30cmの2面（図5~8）で検出を行なわざるを得なかった。検出した遺構は最下層より弥生時代中期の堅穴住居跡、古墳～奈良時代と思われる溝と、同面と上面にわたって中世～近世にかけてのおびただしい土壌・井戸・柱穴を検出している。

遺構は鎌倉～室町期がほとんどを占めるが、度重なる戦火で史料が焼失しており性格づけは難しい。近世は数多く残る古絵図と対照が可能である。当該地は文化9(1812)年の古図によると東長寺の境内もしくは路上に当たり、文政4(1821)年の筑前名所図会（図4）以降民家となっている様で現代に至っている。図中、大八車の手前の屋根がこれに相当する。

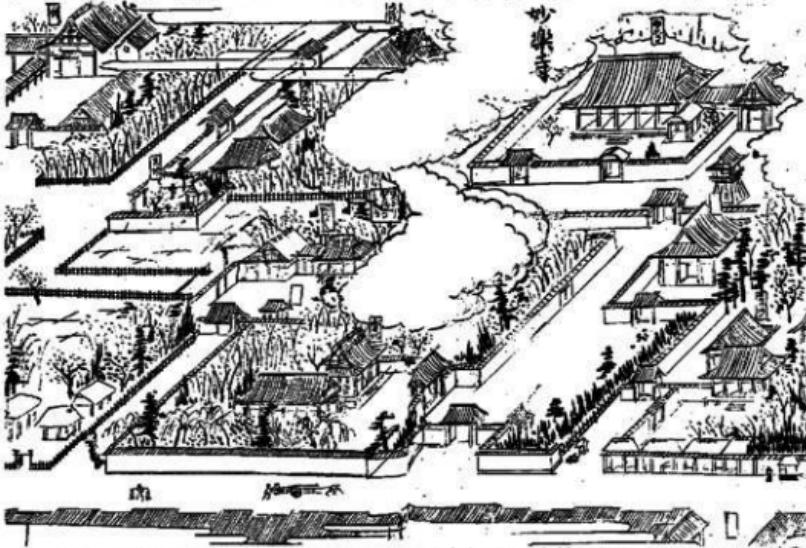


図4. 妙楽寺・永寿院附近古絵図『筑前名所図会卷の二』奥村 玉蘭 文政4(1821)年



図5 調査区上面遺構全景（北東より）

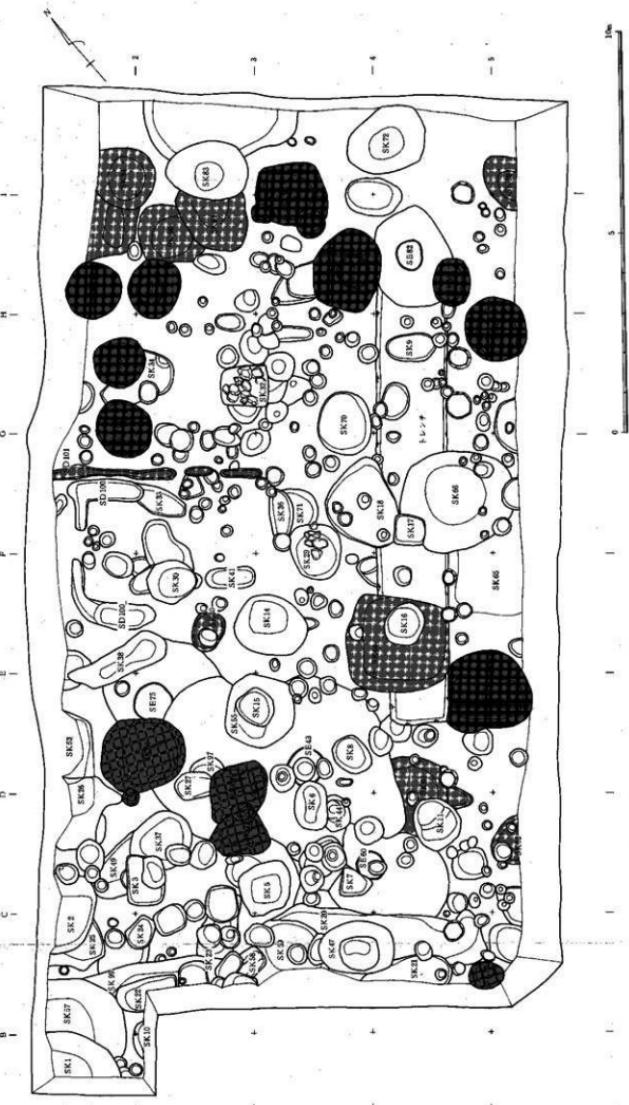


図6 調査区下面遺構全景（北東より）

現代
15-16世紀
平安時代

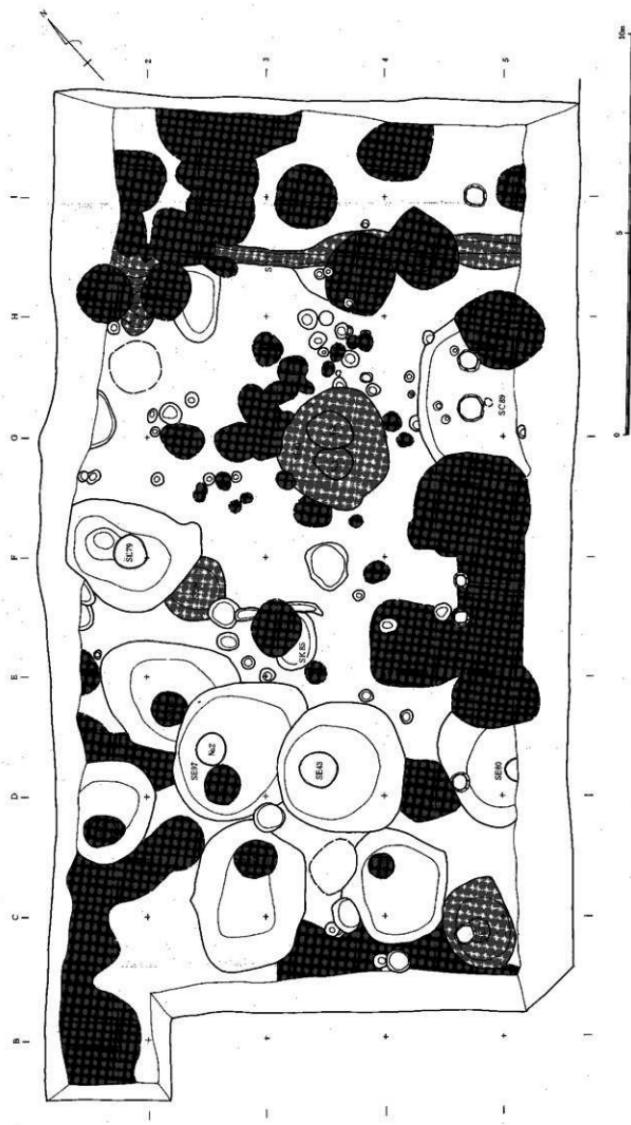
— 8 —

図7 恵多遺跡群第30次調査上面遺構全体図 (1 : 100)



上面薄
占據～半米

図8 博多港新埠30次調査下面透視全体図 (1:100)



(1). 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては中期前半～中期中頃の竪穴住居跡を一基検出した以外は土器石器を古墳～中・近世の遺構・包含層に混在する形で少量検出したのみである。

S C 89号竪穴住居（巻頭図版1、図9・10） 下面（図6・8）のG 4 グリッド附近で検出した。北東と南西側をS K98号土壤（明治初年）とS K66号土壤（13～14世紀）とによって切られ、南東側半分は調査区外になり、さらに中央部に径50～60cmの工場建物のコンクリート基礎が2本差し貫ぬいており、全周の4分の1が残る程度である。

内部には床面より30～50cm浮いた状態で甕・壺・器台・支脚の破片がレンズ状に大まかに2段にわたって堆積しているが、時期差はなくいずれも中期前半～中期中頃のものである。住居廃絶後、廐棄物処理用に転用されたものである。

住居上端の円弧により復元すると、直徑約5.5m程の円形竪穴住居跡と思われる。周壁の残りは比較的に良好で南東壁面の土層の観察より、60～70cmを測る。

柱穴は周壁に沿って3個確認されており、北よりそれぞれ径21.5cm床面よりの深さ36cm、径31cm深さ12cm、径22cm深さ31cmを測る。北端の柱穴には土器片を数いて根固めを行なった痕跡が伺がえた。周壁からの位置及び柱穴の規模からすると両端の二つを主柱穴とするのが妥当と思われる。中间のものは補助的なものか、もしくは後世の上部からの掘り込みとも考えられる。柱穴下端の径を柱径と考えるならば径11～12cmのいかにも脆弱な柱であり、そのためか、柱間



図9 SC 89号 竪穴住居跡完掘状況（南西より）

も短かく174~175cm程しかない。ほぼこの間隔で円形に巡るとすると7~8本の主柱を持つ、当時としては小型の部類の住居に属するものである。形態的に土器の年代観とも矛盾しない。全貌が明らかでないため断定はできないが、規模からして棟を持たない円錐形の上部構造を持つものを想定できる。

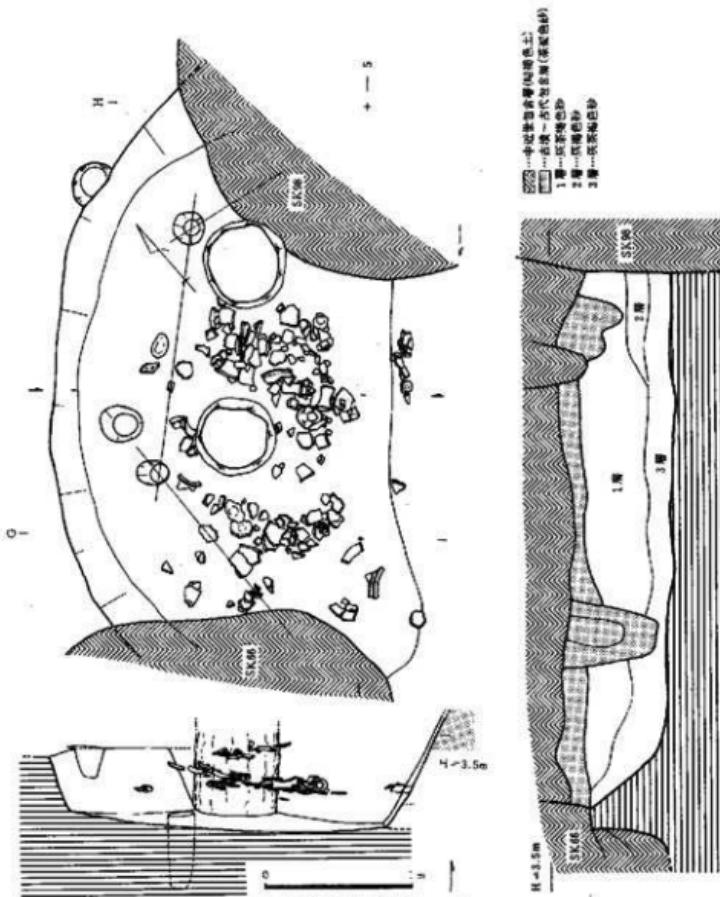


図10 SC 89号竪穴住居跡 (1 : 40)

SC89号住居跡出土の遺物（図11～17）

竪穴住居から出土した遺物には石器と土器がある。報告では、博多遺跡群で見つかった弥生中期の住居跡の初例ということもあって、その殆どを図化するよう努めた。

まず石器についてであるが（図11）、1は石包丁の破片である。打製であるが、湾部には両面剥離により刃部を形成しているので、この状態で使用されていた可能性もある。2は基本的には凹み石の形態をしているが、側縁部には敲打痕や擦痕も留めていることから、敲き石や磨石の機能も備えた multiple tool である。3は磨石の形態を基本としているが、側縁部には敲打痕もみられることから、2と同様多機能を備えた道具である。4・5は磨石や手持ち砥石としての機能を備えたもので、敲打痕は全く認められず、磨る用途のみに使用されている。両方と

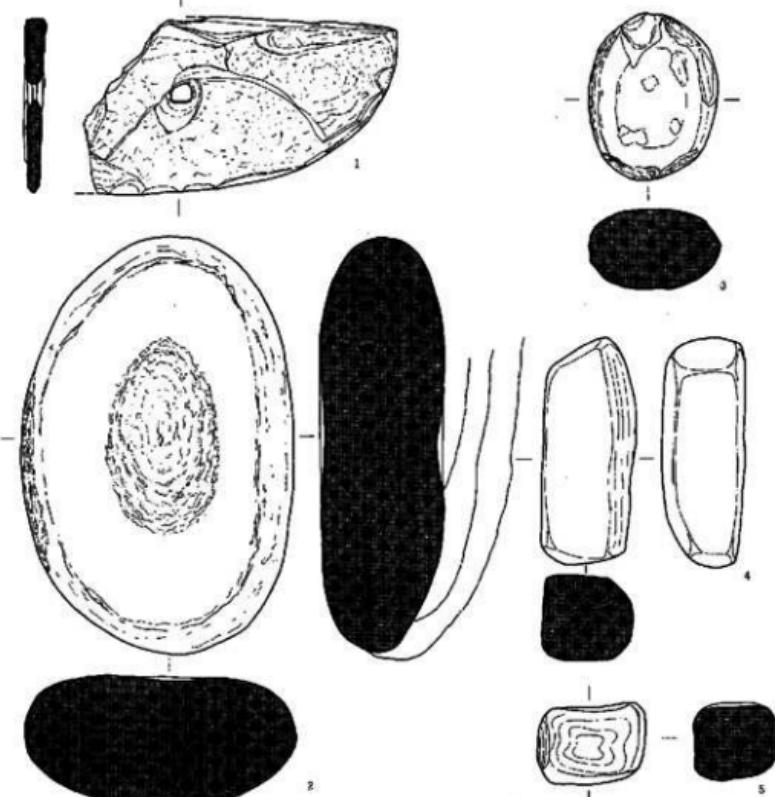


図11 SC 89号竪穴住居跡出土遺物(1) (1 : 2)

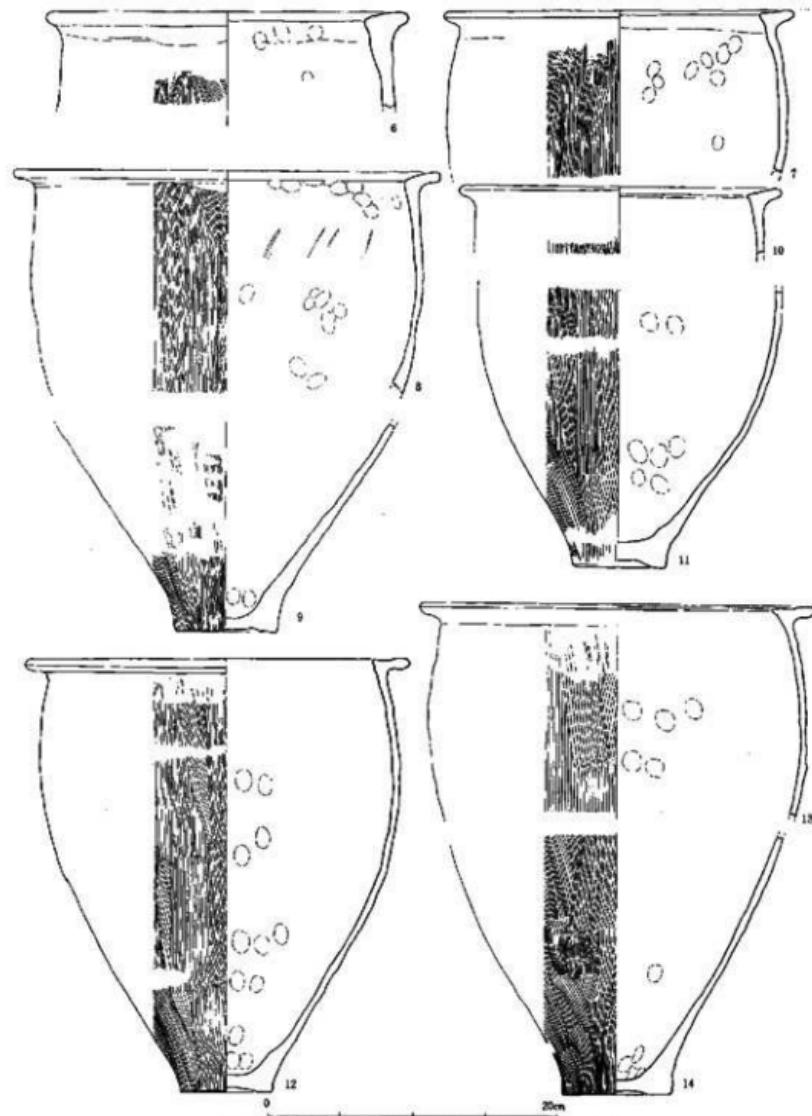


図12 SC 89号 脊穴住居跡出土遺物(2) (1 : 4)

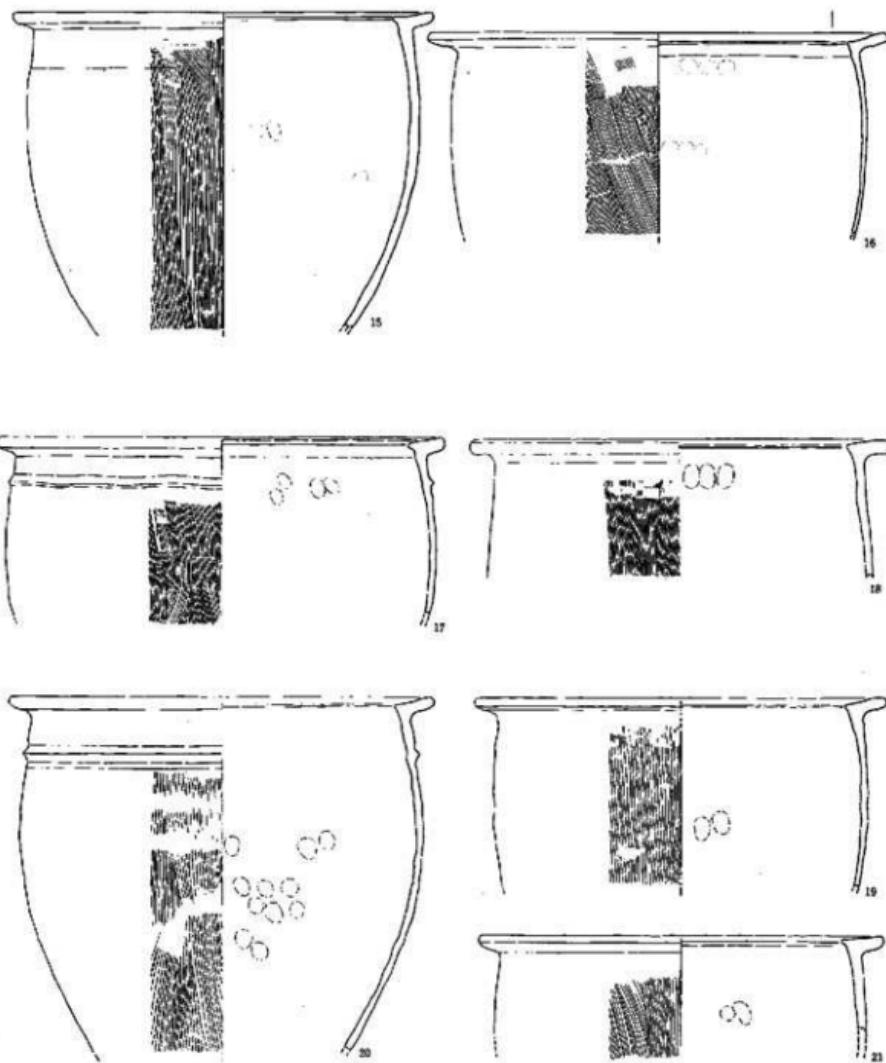


図13 SC89号 穹穴住居跡出土遺物(3) (1:4)

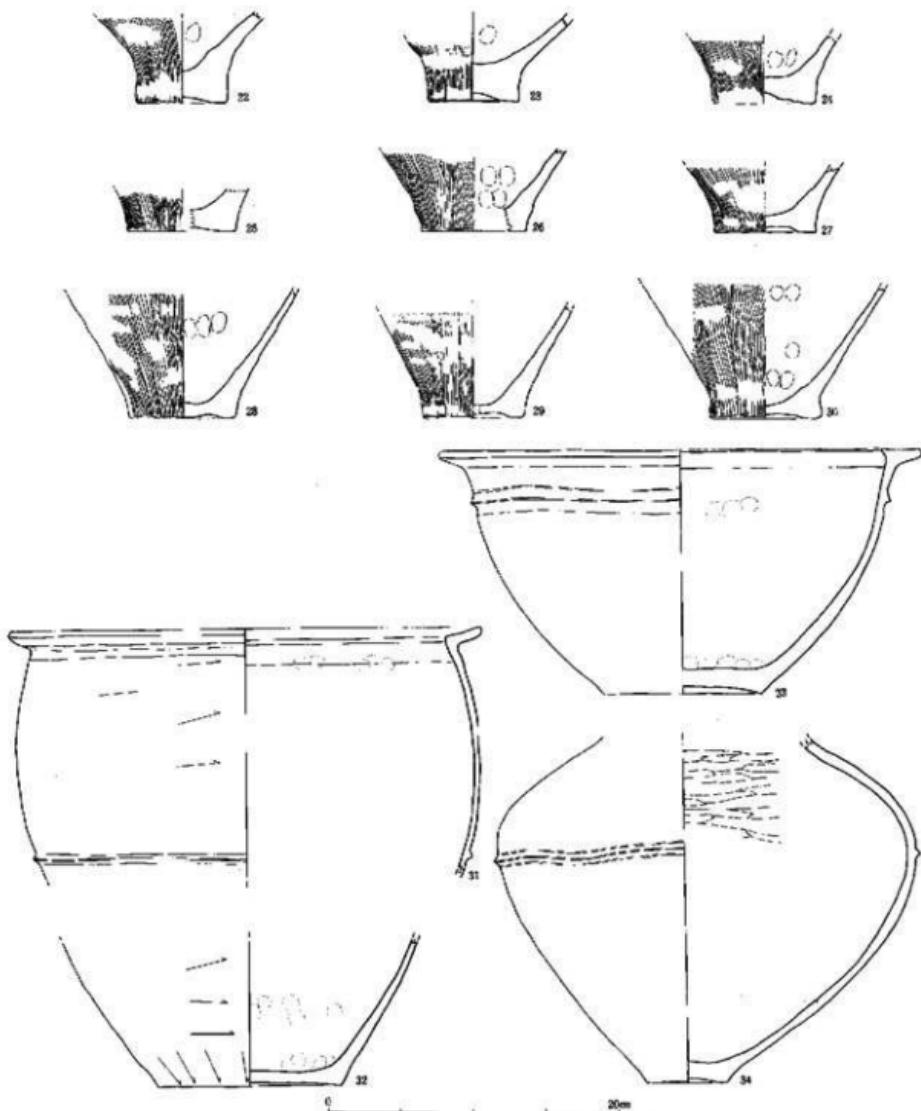


图14 SC 89号聚落居住区出土遗物(4) (1 : 4)

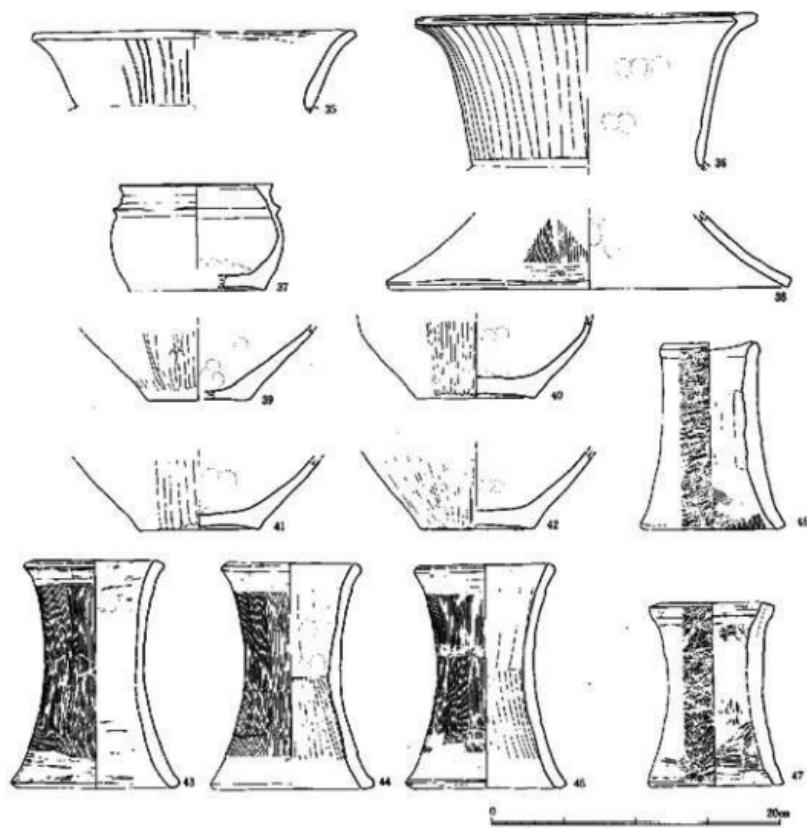


図15 SC 89号 竪穴住居跡出土遺物(5) (1 : 4)

も6面全てを使用しており、方柱状を呈している。他に同じ用途に用いられたものが6点有り総じて特異な石器組成を呈している。

図12～14は菱形土器である。口縁部の形態は、ゆるく内傾して断面三角形を呈するものA類（6・7）と、同じく内傾して逆L字形の断面を呈するものB類（8・12）と、さらに口縁内面が張り出して鎌形口縁を呈するものC類（10・13・15～21）がある。底部は厚さ2.5cm程の厚目で凹面状の上げ底になるもの（22～25）と、1cm程の薄目で浅い高台状の上げ底になるもの



図16 支脚 46



図17 支脚 46タタキ痕

(9・11・12・14・24・26～30) の2種類がある。前者はA類の底部にあたるものであろう。後者はB・C類の底部である。器面調整は外面は全て縦方向のハケ目調整で、内面は丁寧にナデられ、部分的に指頭圧痕を残している。胎土は1.5mm前後の砂粒をやや多く含み。

色調は暗灰褐色～赤褐色を呈する。遺物は器台の2点以外は小片となって投棄されており、完形に復元できるものは少なかった。12は壺の中で唯一完形に復元されたもので、口縁外径26.2・胴径24.6・底径6.3・器高30cmを測り、外面に煤が付着する。8と9、10と11は調整・胎土等から同一個体と推測される。総体として、口縁外径は22.2cm～31.7cmを測るが、27.9～29.2cm間に13点中6点が集中し、28cm前後のものが多用されている。31・32は上記の壺と異なり広い平底を持った構型の壺である。緻密な粘土を用いた精製品で外面赤褐色で磨研が施される。接合しないが同一個体であろう。外面の調整は若干粗くヘラナデ様のケンマが横方向に、底部は縦方向になされる。内面は丁寧にナデられる。口縁外径32.2・器高約32cmを測る。

33は鉢形土器で口縁外径32.8・器高17.5・底径10.8cmを測り、浅い上げ底を成す。胎土は粗く砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整である。37は小型の鉢形土器で口縁外径10.5・胴径11.8・器高7.4・底径9.4cmのゆるい上げ底の構型を呈する。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み、外面はケンマされ内面は丁寧にナデられる。

34～36・39～42(図15)は壺形土器である。口頸部が強く屈曲してやや短か目に外反する35と、長く外反し幅の狭い鉢形口縁を成す36が有る。共に外面に縦方向の暗文を施す。内面は横方向のケンマがなされる。口縁外径は35が22.1・36が23.5cmを測る。底部は径5.5cmで小さな上げ底を成す34と、それよりやや大型で底径が7～8cmを測る39～42とがあり、いずれも外面は研磨・内面はナデ調整がなされる。

38は傘蓋の口縁部であろう。外面は縦方向のハケ目調整を施し口縁直上は横にナデる。内面にはナデ調整がなされる。口縁外径27.8cmを測る。22はこれの把手部分とも考えられる。

43～45は器台である。くびれ部は胴中位に位置するが、受部が台部より幾分小さいためくびれが若干上位に寄っている様な印象を持つ。いずれも外面は縦方向のハケ目調整を施し、内面には指頭・ヘラによる縦ナデが施され、受・台部の内外を横にナデしている。胎土は緻密なものが用いられ、色調明黄褐色～明赤褐色を呈する。43は受部外径9.9・器高15.8・台部外径11.4cm、

44は9.6×15.6×11.2cm、45は9.6×15.5×11.0cmを測る。器壁は薄く、全体的に端整な造作である。

46・47は支脚である。形態は器台に似るが、径、器高ともに器台より一回り小さく、くびれの度合いもゆるやかである（図16）。造作は粗く、外面は縦方向のハケ目調整後、多分ハケ目調整の板と思われるが、これの側面を用いて幅5mm、当て幅1~2cm程の右上がりの雑なタキを右に回転しながら縦方向に施している（図17）。内面は縦ナデ後、受・台部附近に横ハケ目調整を施し、この内外を横にナデしている。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み、器壁は厚い。火熱を激しく受けしており、胴部外面は表面が剝離し、器壁が厚いために火熱を受けた時の外面での温度差が大きいのか、内面くびれ部は大きく爆ぜており、全てこの部位で破損している。色調は淡赤褐へ黄灰色を呈する。46は受部外径6.8・器高12.9・台部外径10.0cm、47は8.6×12.8×9.3cmを測る。

一定程度の面積からの検出であるので近似値しか表わし得ないが、各器種の構成比は、甕42.2%（14）鉢5.9%（2）壺23.5%（8）傘蓋2.9%（1）器台17.6%（6）支脚8.8%（3）である。カッコ内は個体数、甕甌類は底部の個体数である。

次に時期を甌をサンプルに田崎博之氏編年（註）によってみると、甌A類はやや古相で甌B、の口縁に相当し、底部はC手法がなされる。甌B、C類は甌B₁に相当するが、底部はC手法ではなく薄いD手法がなされ、次のB₁に近く、B₁～B₂への過渡的な形態を示している。壺は広口壺Ⅲ・Ⅳに当たり、総的には須歎I式中段階～新段階の過渡期に相当しよう。

弥生時代のその他の遺物（図18）

造構はSC89のみであったが、遺物は古墳～近世造構・包含層に混在し少量だが広く分布している。48～53は甌形土器で、48はB類、49・50はC類に当たる。54は小型の鉢形土器で口縁は内傾し弱い鋤形口縁を成す。口径9.6cm、器高約7cm、底径4.6cmを測る。55は鉢形上器で口径29.9cm、口縁下に若干幅広の低い三角突帯を貼付する。SC89も含め、今調査ではこの手の突帯が特徴的である。56、57は壺形土器である。56は外面にハケ目を残す。57は底径12cmを測るやや大型の器種である。51が城ノ越式で古い様相を示す以外はSC89と同時期のものである。59は刃部の両面剝離のみを施した石包丁の未完成品で暗青灰色の粘板岩製。21.6×7.7cmを測る。58は石包丁完成品の半欠で全面に研磨がなされている。

（註） 田崎博之「須歎式土器の再検討」 九州大学文学部史淵第122集 1985

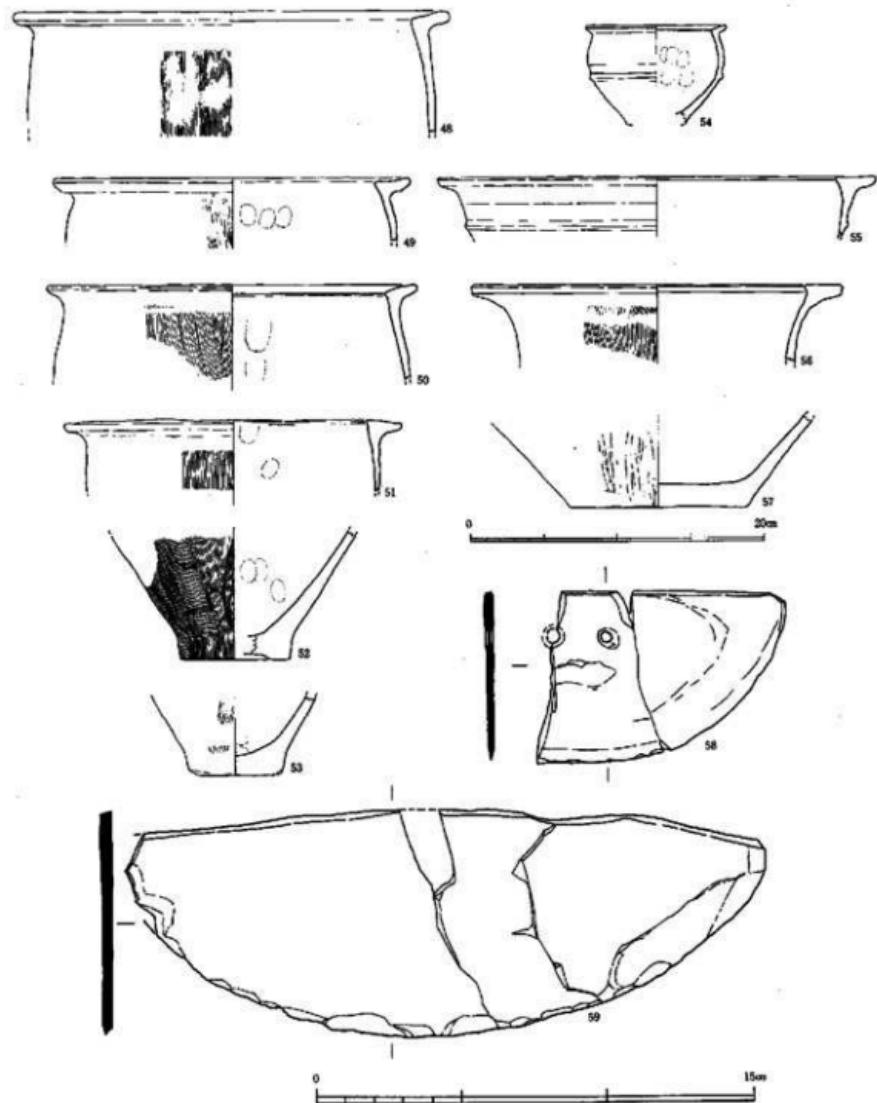


図18 茎生時代のその他の遺物 (1 : 4、58-59のみ 1 : 2)

(2). 弥生終末～古代の遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、弥生中期の住居跡と中近世の井戸・土壙が、主体である。ただし出土遺物は、その間の時期も含まれており、本来、調査区付近に該期の生活の痕跡があるものと思われる。

60は、球形の胴部を有する短頭の壺形土器で、福岡平野では後期の始めからこの系統の器種が漸次見られる。胴部下半が残っていないので形状の細部は判らないが、内面がナデ調整で、ケズリが施されていないことから、尖底状の丸底を呈するのではないかと思う。時期は、単独なので断定できないが、弥生終末～古墳時代にかけてのものであろう。色調は淡赤褐色を呈する。61も60と同系統の器種と想われるが、細片なので断定できない。胎土は砂粒を含み、色調は外面が茶灰色、内面が淡灰色を呈する。62は、2重口縁の甕あるいは壺形土器の口縁部で、大型である。口唇部にハケ木口による押圧文を施す。胎土は細砂粒を含み、色調は、外面淡黄褐色、内面淡灰褐色を呈する。時期は、古墳時代前期と思われる。63は、須恵器の甕。外面に斜方向の板日によるタタキ、内面にあて具の文様を残す。64は須恵器の坏。焼成は良好であるが、色調は灰白色を呈する。65は、上師器の甕あるいは瓶の把手の一部。胎土は大粒の砂粒を多く含み、色調は淡橙色を呈する。SD95よりこれのみ出土している。SD95は主軸をN-49°-Wにとり、調査区を横断する。現街区にはば沿う。幅51cm、深さ33cmを測り、床面は南東が若干下がる。古墳時代～古代にかかる時期であろう。

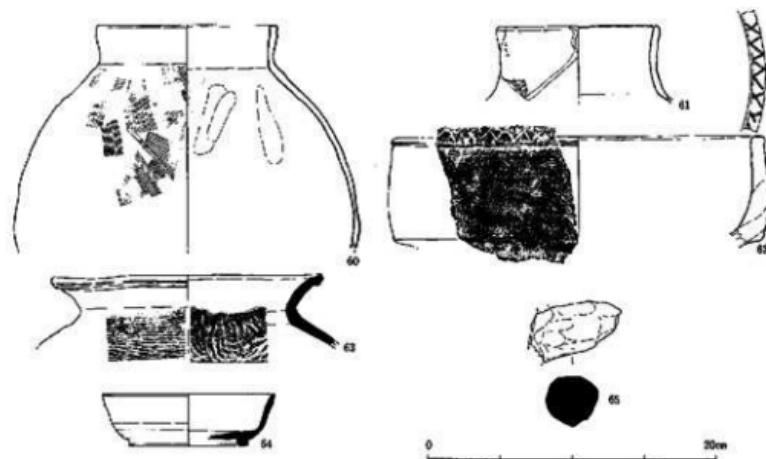


図19 弥生終末～古代の遺物 (1 : 4)

(3). 平安末～中世の遺構と遺物

今調査の主体をなすもので、今遺構の9割近くを占める。上下2面にわたって65基の土壙、11基の井戸、2条の溝と夥しい数の柱穴を検出している(図7・8)。図のようにすさまじい遺構の切り合いで当該地の活況を示す証左となっているが、このため遺物の混在が激しく整理・検証を一層繁雑なものとしている。

各遺構を概観すると、12世紀中頃以降の平安末の遺構を下面を中心に15基、中世は上面を中心に63基の遺構を検出している。内訳は平安末の井戸が2基・土壙12基・溝が1条、中世は井戸9基・土壙53基・溝1条である。

中世の遺構は13世紀～16世紀にわたっているが、殊に13世紀後半～14世紀前半頃に47基の遺構が集中しており、当該地の最盛期を示している。しかし、以降15・16世紀代に入ると4基と、激減する。平安末～鎌倉時代の盛行は「宋人百堂」と、後その地に建立されたと言われる聖福寺(創建、延久6～1199年)にかかるものである事が推察される。15・16世紀には町の中心は北西側の呉服町・冷泉町一带に移行していったと思われる。

遺物では他地点同様貿易陶磁の多量さが目立つが、殊に瓦が多く、全遺物の4割近くを占める。しかも軒平瓦は全て北方系と言われる押圧文様によるもので、周辺に特異な遺構の存在が考えられる。

この他、各遺構の概略は巻末の一覧表を参照されたい。

溝

SD100・101の2条を検出している。SD100は「コ」の字形に巡る。上面では確認できなかったが下面のSE79を圓む形になっており、井戸の排水溝の可能性が高い。遺物は(図20)66が同安窯系平底皿I-1類、67・68は土師器系切り皿。他に龍泉窯系碗I類、白磁碗V類等が出土し12世紀中～後半の時期を示すものが多いが、十筋皿より13後半～14世紀初頭に窶棄されたものと考えられる。SD101は幅54cm深さ17cmを測り、方角をSD95同様N-48°-Wにとり、SE81附近までのびる。遺物は多量の瓦の他、実測可能なものは69のみで、小さな茶碗をもつて東地方産の白磁碗。11世紀末～12世紀前半代である。年代もSE81と矛盾せず、SD95同様の性格が考えられる。

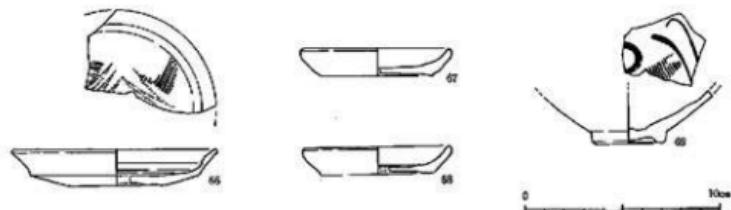


図20 SD 100-101 分溝出土遺物 (1 : 3)

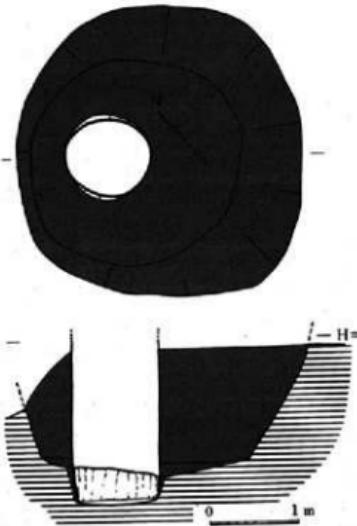


図21 SE 43号井戸 (1 : 50)



図22 SE 43号井戸掘方断面 (南西より)

井戸

井戸は12基確認している。径2~4m前後の円形の掘方に50~80cm前後の木桶を井筒として据えたものである。SE43(図21)は比較的に残りが良いもので、 3.48×3.44 mの大きな掘り方を1~3mm前後の粗い砂礫層まで掘り下げ安定した地盤を確保した後、さらに桶が1個収まるだけの穴を掘り径90cm前後の桶を井筒として据えている。井筒は最下段が残るのみで、それも井筒内を掘り下げるに従って半分土と化した木質が板状に内側に倒れ込む事で桶である事が知れる程度である。埋土は土と砂とを交互につき固めたもの(図22)である。

平安末のものは南端部(SE77)と中央部(SE81)の2基である。SE81は井筒を2基並置するもので切り合は認められず、当初から2基置かれたもの様である。SE97も同様と考えられる。井戸底の標高は1.50~1.78mを測る。

中世の井戸は9基検出しており、このうち8基が西半部に密集する。SE82を最古(12C末~13C中頃)に、SE60を最新(14C後半~15C前後)として、SE82→SE73・74(13C後半~14C前半)→SE75(→97→43)・79・80(13C末~14C前半)→SE60と移行する。又、当時の街区に沿っているのであろうか、SE73・74・75~43・79・80の各時期の井戸の掘り方はN-16°~23°-Wの方向に並行している。井戸底の標高は平安末に比べやや深めで1.22~1.44mを測る。

土壤

土壤は調査区上下全面にわたって65基確認している。形状・深さも種々である。遺物も一括投棄された様なものはなく、少片がバラついて出土する状態のものがほとんどで性格づけは難しい。古代木のものは12基確認されており、北端と南端に集中する傾向が認められる。又、SE77、81を挟んで、SE77-SK61-SK64-SE81と一直線にN-3°-Eではほぼ南北向に並び、他調査地点の成果に符合している。中世の段階では53基の土壤を確認している。このうち、87%近くを占める13世紀中頃～14世紀前半のものは短期間に集中し過ぎて分布状態の傾向を見出しえない。15世紀～16世紀代のものはSK12・28・54・78と4基確認しており、全て西部に集中し、井戸集中地区に重なる。しかも、井戸の分布と同じ様に、SK78～SK54が一直線にN-16°-Wの角度を取っており、角度もそれに近いものである。おそらく、他の土壤も多くはこれに並行するものであろう。隣接する東長寺の調査（1次・8次調査）では14世紀前半代にN-30°-42°-Wに方位を取る5条の溝が検出されている。井戸と15～16世紀代の土壤は古代木の土壤の方向とこれとの中间に位置している。

各土壤の詳述はできないが、比較的良好な状態で遺物を検出した、SK71号・SK9号土壤のみ詳述する。SK71号土壤（図23）はF-3グリッドに存する。SK36に切られ上端を欠失しているが、 $1.16 \times 1.04\text{m}$ 、深さ61cmを測る円形の小土壤である。遺物は多量の瓦と白磁碗II・VI類等が出土しているが、復元可能なものののみ図示した（図27）。

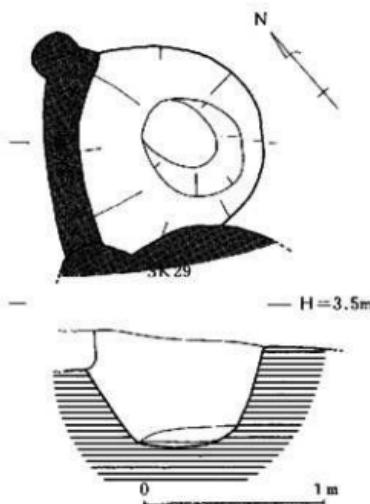


図23 SK 71号土壤 (1:30)

70は白磁水注で、胴部の一部を欠くのみの完形品である。大部分をこの附近の遺構面掘削中に破壊状態で回収し、残りの数片がこの土壤内出土のものである。倒卵形の胴部に長い注口を付けたスマートなもので、頭部の両側に耳を2ヶ所、後に幅2.9cm厚さ0.5cm、外面に縱方向の凹線を2条入れる扁平な把手を付ける。胴部には複雑な3条の横凹線を入れた後、瓜割様に浅い縱方向の凹線を12条入れる。やや黄味がかった淡灰色の透明釉を内面～外面高台部まで施し、胴部下半に水袋が入る。胎土は黄味がかった淡灰色に黒色散砂を少量含むや粗目のもので、露胎部は淡黄灰色を呈する。高台内に「三吉」の墨書きが見られる。日本人名であろう。注口が正面左側に傾くなど全体的に複雑な造作である。

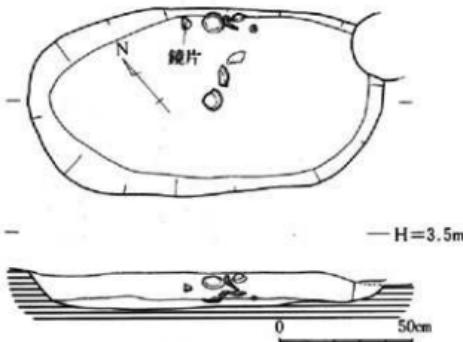


図24 SK 9号土壤 (1 : 20)

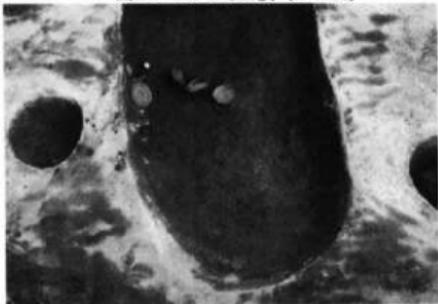


図25 SK 9号土壤全景 (北西より)



図26 SK 9号土壤遺物出土状況 (北東より)

口縁径9.3・胴径13.6・器高24.7cmを測る。71~74は土師器杯・皿で全て右回転の糸切り、71以外板圧痕を残す。71が口径16.6器高2.5cm、72が16.2×2.5cm、73が8.5×1.0cm、74が8.0×1.0cmを測る。75は土師質の土鍋で口径22.7cm・器高12.3cm。内・外底に粗いハケ目を残す。内面上半は板ナデである。76~78は北方系の軒平瓦で灰色を呈する。この土壤に限らず殆どの土壤で瓦を検出しているが、丸瓦は2片以外網目叩きである。以上、土師器より13世紀前半代に廻棄されたものであろう。

SK 9号土壤(図24~26)はG-4グリッドに存する。1.27×0.66mの長梢円形で、深さ13cmを測る。遺物は(図28)壁周縁より出土している。79は銅鏡片で丸味を帯びた台形の外縁を持つ。人為による変形著しいが、推定径17cm前後を測る。80~83は土師器皿で全て右回転糸切り。口径7.7~8.4、器高1.1~1.6cmを測る。84は銅鏡で径1.0・方孔径0.5cm・厚さ0.85mmを測る。文字らしきものが認められるが判読できない。土師器より13世紀後半~末に比定される。

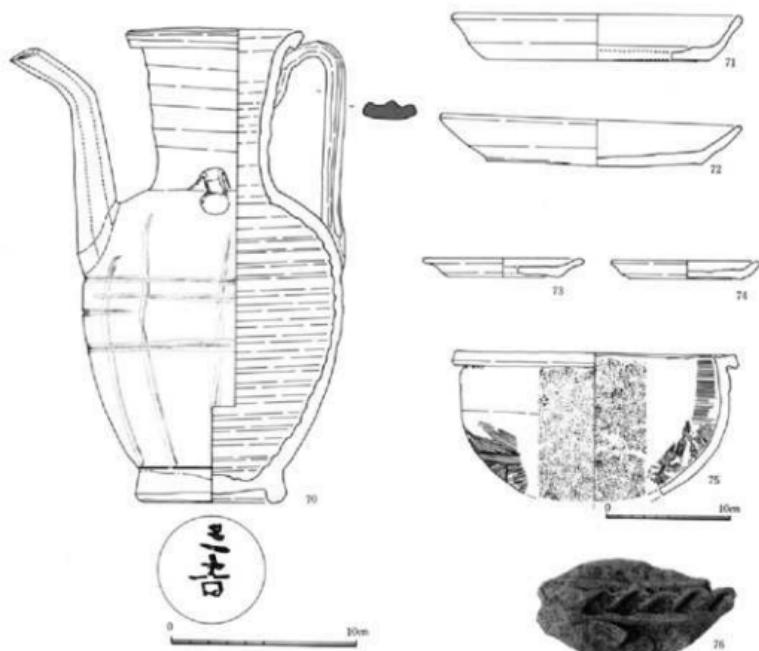


図27 SK71号土壤出土遺物
(1:3・75のみ1:4)

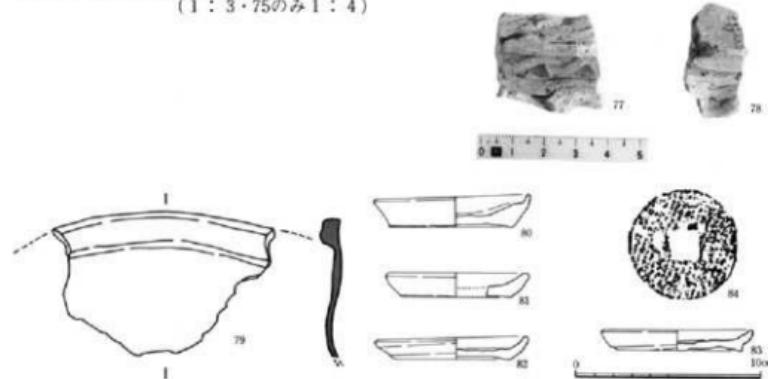


図28 SK9号土壤出土遺物 (1:3, 79-84のみ1:1)

その他の遺物

図29は墨書き器である。85からそれぞれ「李綱」「博」「王口」「昌堂」「和」「十」「常住」「金」「下」と読める。85・86・92は白磁碗Ⅱ類、88は同Ⅳ類、89は同Ⅵ類、93は白磁高台付皿Ⅰ類、87は龍泉窯系青磁碗Ⅴ類、91は同Ⅰ類である。

図30は軒丸瓦である。94は銀杏文様、95は複弁蓮華文の小片で安楽寺と同種である。96・97は扁平な木葉形を陽刻する。98～101は杏仁状の文様とその間の3点の珠文とそれに連なる放射線によって構成される。102は菊弁状の文様を陰刻する。

図31は軒平瓦で全て連続押圧文を施す。波の大きなもの(103・105～112)と小さなもの(104・113～116)と、中間部の波を左上からの刺突で表現するもの(110・116)と右上からのものがある。

図32は青白磁菩薩像の右手部分である。14世紀前期の景德鎮産であろう。

図33は鉄器で117～119は刀子、120は雁又式の鉄鎌、121は鉄釘、122は巻の引手である。

図34は瓦玉で、円形扁平な形態で周縁を打ち欠き、もしくは磨り取るもの全てをこれとした。

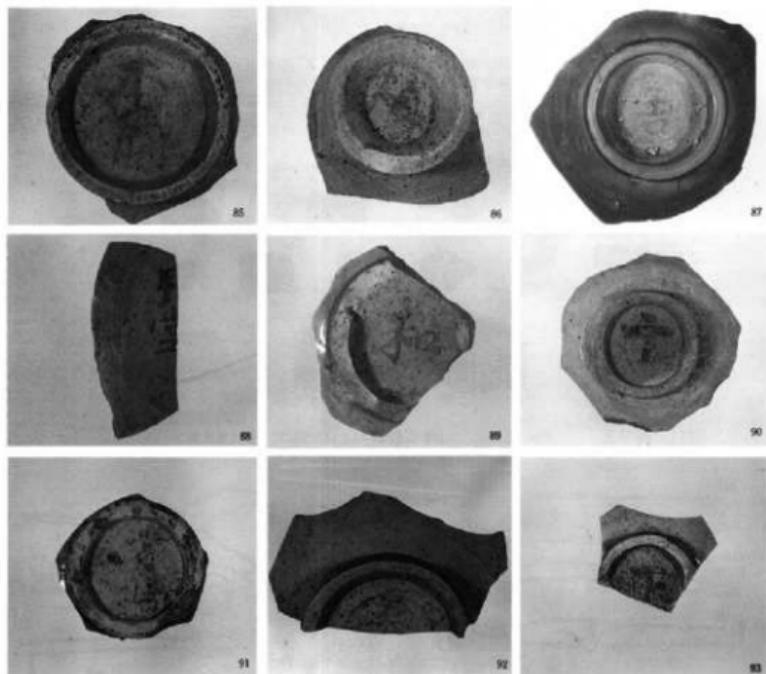


図29 墨書き器 92-SK98
他は包含層

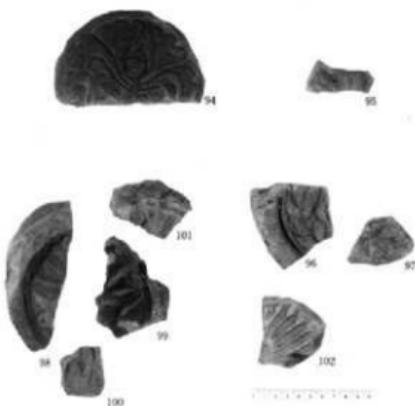


図30 軒丸瓦
94-SK 99 102-SK 23
97-SE 84 他は包含層
100-SK 20

124～142は瓦・土鍋・瓦質土器製、144
は滑石製。143・161は陶器の胴部を145
～160は青磁白磁の高台部分を用いて
いる。大部分は遊具と考えている。

図35は砂岩製の球で径2.4～4.8cmと
様々で棒杖のみに限らず手玉・穴一等
の遊具と考えられる。

図36は漁撈具で171～173は鉄製釣針、
他は土鍤である。



図32 青白磁菩薩像手 SK 54

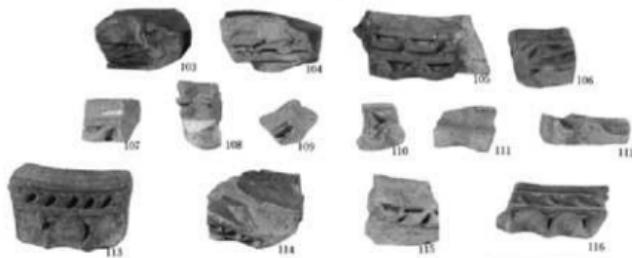


図31 軒平瓦
104-SE 77 108-C 4, SP 11 111-SK 21 他は包含層
107-F 2, SP 17 109-SK 29 115-SK 20

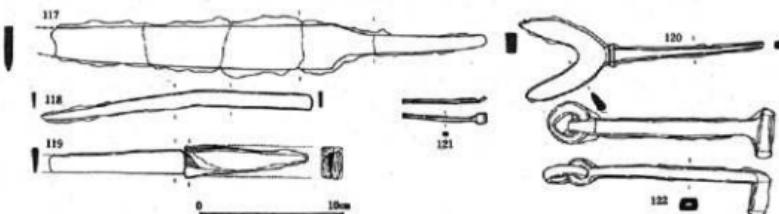


図33 鉄器 (1:4) 119-SE 79 120-SE 80 121-SK 6 122-SK 14 他は包含層

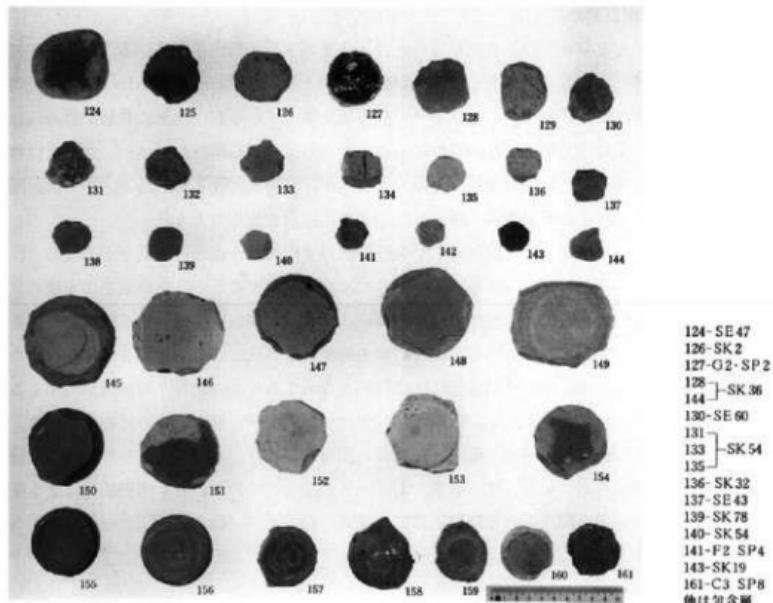


図34 瓦玉

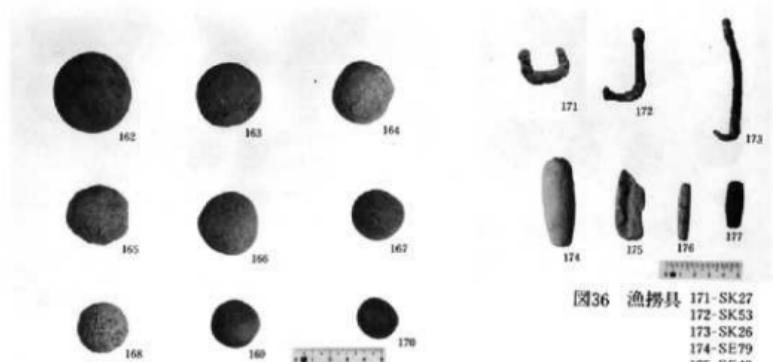


図35 毽杖の球
162-SE 73 167-SE 9
164-SK 30 170-SK 31
165-SK 99 他は包含層
166-SK 31
168-SE 60
170-SK 31

(4). 近世の遺構と遺物

調査区の北東半部を取り囲むように6基の土壙と2基の井戸が検出されている(図7)。井戸はいずれも瓦枠である。土壙の大部分は廃棄物処理用のものと思われる。SK19は深2m前後、深1.39mと大型で底面は砂層を深く掘り下げる井戸状を呈しているが、内部に井筒が認められず、また湧水点(現時点で標高1.2m前後)にも達しておらず(底面標高2.11m)、井戸とは考え難い。廃棄物処理と排水施設を兼ねたものであろうか。SK98も同種と思われる。検出面が深いため柱痕跡が残っていないが遺構に囲まれた空間部に住居を想定できる。

廃棄時期はSK92の18世紀前半を最古として大部分は19世紀初頭～幕末の時期を示しており、江戸前期の遺構は見当たらない。博多古図を頼りに当該地を見てみると、三奈木黒田家蔵の文化9(1812)年写しの古図では東長寺境内か道路に、文政4(1821)年の筑前名所図会・三宅酒壺氏蔵の文政6(1823)年写しの古図には町家の表現がなされている。元禄3(1690)年の戸数20軒が明治22(1889)年の市制施行時には78軒となっておりこのあたりの事情が伺がえる。

図37はSK19出土の一括遺物である。時期は1810年代～幕末。伊万里・唐津の肥前系が43点、高取等の九州産陶器が13点、美濃・瀬戸・京焼等の関西系が27点、七輪・火鉢等が13点で、総数の28%を関西系が占めている。他の遺構でも2～3割出土しており、五ヶ浦廻船等による経済活動を物語っている。関西系の掲釉瓶底部に「増武 卯三月 拾本ノ□□」との墨書がある。



瀬戸他、関西系陶磁

伊万里他、九州系陶磁

図37 SK 19号土壙一括遺物

III. まとめ

以上、概略を述べてきたが、ここで各時代毎に総括しておきたい。

弥生時代 博多湾岸の古砂丘上には西から今宿横浜遺跡・姪浜新町遺跡・藤崎遺跡・西新町遺跡・博多遺跡群(地下鉄店屋町工区A-C調査区・地下鉄祇園駅出入口2調査区・博多24次・博多32次調査区)と弥生時代前期・中期の遺跡が分布しているが、いずれも墓地遺跡であり、住居構造を検出したのは今回が初めてである。時期も周辺の櫛棺墓と符号する。本調査区の南・東側に住居群が広がる可能性がある。住居内より1点、包含層より2点の石包丁を検出しており、後背湿地での水稲耕作が推察される。出土土器であるが、中期前半末～中期中頃の良好な一括資料である。タタキの施された支脚も珍しい資料で、タタキの技法はハサコの宮K24下の前期末の甕に施されたものに近い。(註1)。しかし、このような小型の器種で、ハケ目調整を行なった上からタタキを施す事にどれ程の効用が有るのか現在のところ思いがめぐらない。大形の甕棺以外には日常の変形土器に認められるもので、煮沸に関係するものであろうか。

平安末～中世 溝3条を検出しており、全てN-48°～49°-Wの方角で現街区に沿っている。時期は12世紀中頃～14世紀初頭が当たられる。溝程の規則制は無いと思われるが、土壤・井戸の並ぶ方向が、平安末でN-3°-Eに、13世紀後半～15・16世紀代でN-16°～23°-Wの方位を取るものがある。平安末では条單の方向に沿うものと地形に沿うものとが混在している様で、中世では条里と1次・8次調査でのN-30°～42°-Wの方向の溝との中間の方向に位置しており、今まで確認されていない方位である。14世紀前半以降殆どの遺構が廃棄されるが、これは地下鉄店屋町工区A-C調査区でも確かめられており、鎌倉末～南北朝期の争乱によるものと考えられる。遺物としては良質ともに瓦が目立っている。50tのコンテナ78箱中、約30箱を占める。瓦当は少ないが、中世通有の巴文瓦・均正唐草文瓦は一片もなく軒平瓦は全て北方系の押平文瓦(註2)で20片を検出。12世紀後半～14世紀前半までの遺構より出土している。軒丸瓦も20片近く採集しているが、95以外は出自不明で、軒平瓦同様北方系であろうか。軒平瓦はこの他、4次・5次・28次・32次調査区、西区大谷瓦窯址で採集されており、12世紀後半前後に冷泉町・御供所町・祇園町の一角にこの種の瓦を用いた建築物の存在が考えられる。

近世 近世の遺構は殆どが江戸後期～幕末の時期を示している。古絵図では文化9(1812)年までは東長寺境内もしくは道路となっているのが文政4～6(1821～1823)年には町家となつており、この状況に良く符号する。慶応2(1866)年の「博多店連上帳」によると、御供所町では桶職正七・蓮根旅野菜問屋清次郎・蓮根旅野菜柑類山野菜安河内三右衛門・つき米糀糰安河内又七・水牛櫛細工秋重佐八・売薬北村正吉の6名が納銀しており、調査区内の遺構はこのうちの店に当たっている可能性も高い。

尚近世陶磁の鑑定は九州陶磁文化館大橋康二資料係長に御願いした。記して感謝申し上げる

次第である。

(註1) 橋口達也「斐宿の編年的研究」『九州総合自動車道関係埋蔵文化調査報告』XXXI

1979 福岡県教育委員会

(註2) 常松幹雄「博多出土の北方系瓦のルーツを求めて」『文明のクロスロード Museum

Kyushu 20号』 1986 博物館等建設推進九州会議

遺構一覧表

遺構No	グリッド	規模 長軸×短軸×深(底面標高)m	時期(C=世紀)	主な遺物
SK-1	A-1	1.75+α×1.15+α×1.43 (1.95)	13C後半～14C前半	口ハゲ白磁・龍泉窯系碗Ⅰ類・青白磁合子・天目碗・B群鉢・C群水注・絞物・行燈
SK-2	B-1	1.00+α×0.93-α×0.52 (2.92)	13C後半～14C前半	口ハゲ白磁平皿・龍泉窯系碗Ⅰ類・B群鉢・瓦・石鍋
SK-3	C-2	1.25×0.95×0.25 (3.26)	13C後半～14C前半	龍泉窯系碗Ⅰ類
SK-4	C-2	0.89×0.82×0.19 (3.30)	13C前半～14C中頃	龍泉窯系碗Ⅰ類
SK-5	C-3	1.30×1.20×0.64 (2.86)	16～17C	白磁平皿・行燈・8介花文軒平瓦
SK-6	C-3	1.24×0.83×0.43 (3.11)	13C末～14C前半	口ハゲ白磁・龍泉窯系碗Ⅰ類
SK-7	C-3	0.75+α×0.82+α×0.12 (3.28)	13C前半～14C中頃	土器容器・环
SK-9	G-4	1.27×0.66×0.13 (3.22)	13C後半～末	銅鏡片・石鍋
SK-10	A-2	0.93+α×0.17+α×0.37 (2.92)	13C末～14C前半	白磁平皿Ⅲ類
SK-11	C-4	1.32×1.17×0.63 (2.86)	12C後半	白磁平底皿Ⅲ・碗Ⅱ・N・VI類
SK-12	C-2	1.20×1.00+α×0.28 (3.29)	16C初～中頃	明青花碗
SK-13	G-1	1.54×1.35×0.35 (3.12)	16C	唐津系鉢・瓦多層
SK-14	E-3	1.85×1.48×1.01 (2.41)	13C後半～14C前半	口ハゲ白磁・龍泉窯系碗Ⅰ類・A群盤・鉢球・刀子・柳引手
SK-15	D-3	0.97×0.83×1.24 (2.14)	13C末～14C	龍泉窯系碗Ⅰ類碗・枳柑系青白磁
SK-16	E-4	1.11×0.96×0.24 (2.82)	13C末～14C前半	龍泉窯系碗Ⅰ類
SK-17	F-4	0.80×0.77×0.23 (2.84)	13C末～14C前半	白磁碗Ⅰ類・瓦器碗
SK-18	F-3	2.13×1.86×0.34 (3.22)	12C後半～13C	青磁・白磁
SK-19	D-4	2.12+α×1.94×1.39 (2.11)	1810年代～幕末	近世一括資料
SK-20	B-3	5.45×1.76×0.87 (2.37)	13C末～14C前半	龍泉窯系碗・II・N類・軒平瓦・他瓦多層・天目碗
SK-21	B-4	1.24+α×0.65+α×?	13C末～14C前半	龍泉窯系碗Ⅰ類・青白磁合子・軒平瓦・石鍋
SK-22	B-2	1.53×0.79×0.43 (2.91)	13C末～14C前半	同安窯系碗Ⅰ類・ヘラ切土彌縫含む
SK-23	B-2	1.68+α×0.94×0.94 (2.52)	13C末～14C前半	龍泉窯系碗Ⅰ類・白磁水注・口ハゲ白磁・軒丸瓦
SK-24	B-2	0.84×0.60×0.30 (2.98)	12C後半	白磁碗Ⅱ類・龍泉窯系碗Ⅰ類
SK-25	B-1	1.47+α×0.65+α×0.40 (2.82)	12C後半	白磁碗Ⅱ・N類・平底皿Ⅲ類
SK-26	C-1	1.78×0.82×0.60 (2.73)	13C後半～14C前半	口ハゲ白磁・青白磁・鉄製釘針
SK-27	D-2	0.97×0.69×0.87 (2.45)	14C中～後半	龍泉窯系碗Ⅰ類・鉄製釘針

遺構No	アリット	規模 長軸×短軸×深(底面標高) m	時期(C=世紀)	主な遺物	
				横軸	縦軸
SK-28	D-2	1.17+α × 1.37 × 0.44 (2.83)	16C初～中頃	ロハゲ白磁・8角小鉢・龍泉窯系碗Ⅴ類・天目碗・石鍋	
SK-29	F-3	1.38 × 1.3 × 0.43 (2.90)	不明	SK31と混在	
SK-30	E-2	1.26 × 1.10 × 0.75 (2.68)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・青白磁梅瓶・龍泉窯系碗Ⅱ類・磁枕	
SK-31	H-4	1.20 × 0.93 × 0.49 (3.06)	18C後半～19C初	肥前系染付	
SK-32	G-2	1.22 × 0.98 × ?	13C後半～13C末	白磁碗Ⅵ～Ⅷ類	
SK-33	F-2	1.18+α × 0.67 × 0.61 (2.69)	13C末～14C前半	龍泉窯系碗Ⅰ・Ⅳ類・天目碗・B群皿	
SK-34	G-2	0.77+α × 0.74+α × 0.24 (3.05)	12C末～13C前半	白磁碗Ⅸ・平底皿Ⅲ	
SK-35	G-1	1.33 × 1.25 × 1.30 (2.11)	19C初～幕末	肥前系染付・陶器	
SK-36	F-3	1.10+α × 0.59 × 0.24 (3.13)	13～15C	その他の青磁Ⅱ類・天目碗・瓦玉・刀子	
SK-37	C-2	1.67 × 1.37 × 1.10 (2.48)	13C後半～14C前半	ロハゲ白磁Ⅲ・龍泉窯系碗Ⅲ類・天目碗	
SK-38	E-1	2.25 × 0.69 × 0.54 (2.85)	13C末～14C前半	白磁平底皿Ⅲ類・龍泉窯系碗Ⅰ類・A群皿	
SK-39	F-2	1.11+α × 1.01 × 0.27 (3.02)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・天目碗・軒平瓦・瓦玉	
SK-40	E-2	0.98 × 0.78 × 0.48 (2.86)	12C後半～13C	河安窯系碗Ⅳ類・B群皿・瓦器塊	
SK-41	E-2	1.25 × 0.51 × 0.27 (3.08)	13C	龍泉窯系碗Ⅰ類	
SE-43	D-3	0.99 × 0.88 × 1.84 (1.29) 3.43 × 3.44 × 1.46 (1.67)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・龍泉窯系碗Ⅲ類・懶戸大日碗・石鍋・格子目印丸瓦	
SK-44	C-3	0.91 × 0.76 × 0.38 (3.11)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・その他の青磁Ⅰ類	
SK-45	C-3	0.60 × 0.45 × + α × ?	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・龍泉窯系碗Ⅰ類・石鍋	
SK-47	B-3	1.89 × 1.30 × 0.63 (2.73)	13C末～14C前半	瓦器塊・鐵鉢・磨石・瓦玉	
SK-48	C-2	1.10+α × 0.51+α × ?	13C末～14C前半	龍泉窯系碗Ⅱ・Ⅲ類・天目碗・A群盤	
SK-49	C-1	1.14+α × 1.04+α × 0.98 (2.51)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・龍泉窯系碗Ⅱ類・天目碗・平行印丸瓦	
SK-50	C-1	0.76+α × 1.10+α × ?	13C～14C初	龍泉窯系碗Ⅱ類	
SE-51	H-3	0.84 × 0.81 × 0.76+α 1.98 × 1.70 × ?	18～19C	福岡県産陶器	
SK-53	D-1	1.55+α × 0.43+α × ?	13C末～14C前半	ロハゲ白磁碗・龍泉窯系碗Ⅲ類・細盤元寶・開元通寶・鐵製釘	
SK-54	D-2	2.20 × 1.85 × 1.01 (2.32)	15C	龍泉窯系碗Ⅸ～Ⅹ類・ロハゲ白磁・青白磁青花像手・天目碗・墨書き白磁	
SK-55	D-2	1.92 × 1.81 × 1.19 (2.11)	13C末～14C前半	龍泉窯系碗Ⅲ類	
SK-57	B-1	2.04 × 1.40 × 0.66 (2.50)	12C中～後半	白磁平底皿Ⅸ類・碗Ⅺ～Ⅻ類・龍泉窯系碗Ⅰ類・瓦器塊・石鍋	
SK-58	B-2	0.85 × 0.57 × 1.17 (1.98)	12C代	白磁平底皿Ⅸ類・碗Ⅺ～Ⅻ類	
SK-59	B-3	1.32+α × 1.40+α × 0.90 (2.41)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・天目碗	
SE-60	C-3	0.64 × 0.62 × 0.65 (1.32) 2.93 × 2.61 × 1.04 (1.81)	14C後半～15C前後	龍泉窯系碗Ⅴ類・白覆輪天目碗・石鍋・瓦器塊・枕枕	
SK-61	C-4	1.42+α × 1.50 × 1.43 (1.68)	12C中～後半	白磁碗・R・V類・龍泉窯系碗Ⅰ類・開元通寶・土器器一部ヘラ切	
SK-62	C-4	0.80+α × 0.60+α × 0.30 (3.16)	12C後半	龍泉窯系碗Ⅴ類	

遺跡No	グリッド	規模 長軸×短軸×深(底面標高) m	時期(C=世紀)	主な遺物	
				白磁	龍泉窯系碗 I類・同安窯系平底皿 II類・B群 半錫・C群青銅
SK-64	E-4	2.60×2.37×0.70 (2.62)	12C後半～13C		
SK-65	E-4	1.62+α×1.53+α×?	13C		龍泉窯系碗 I類
SK-66	F-4	2.98×2.51×1.74 (1.50)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・龍泉窯系碗 I類	
SK-69	I-5	1.32+α×0.80+α×0.76 (2.75)	12C後半	白磁碗	
SK-71	F-3	1.16+α×0.62+α×0.58 (2.80)	13C前半	白磁碗 I・II類・平底皿 II類・白磁水注 ・軒瓦他瓦多數	
SK-72	I-4	2.08×1.52×0.75 (2.72)	13C前半～末	龍泉窯系碗 I類・平底皿 II類・大日鏡	
SE-73	C-2	1.05×0.92×1.86 (1.22) 3.84×2.60×1.25 (1.58)	13C後半～14C前半	龍泉窯系碗 I類・天片鏡・塔	
SE-74	C-1	0.67×0.59×?	13C後半～末	ロハゲ白磁皿・塔	
SE-75	D-2	2.66×1.90+α×1.43 (1.52) 0.92×0.87×0.37 (1.45) 3.55+α×2.70×1.18 (1.91)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・龍泉窯系碗 I類・吹子羽口・鐵 杖球	
SK-76	C-3	0.75×0.68×?	13C末～14C前半	ロハゲ白磁	
SE-77	B-4	0.63×0.55×? 2.07×1.70×0.86 (1.91)	12C後半	白磁平皿 I・II類・碗・圓盤・圓桌 I・同安 I 類・軒瓦瓦多數・塔	
SK-78	B-4	0.88×0.66×0.31 (3.08)	15C中～後半	龍泉窯系碗 I・粉彩沙器	
SE-79	F-1	0.89×0.81×0.28 (1.31) 3.46×2.72×1.32 (1.74) 0.60×0.32+α×?	13C末～14C前半	龍泉窯系碗 I・II類・C群水注・鐵杖球・磨 石	
SE-80	D-4	3.19+α×1.92+α×0.74 (2.20) 3.04×0.82×0.39 (1.53)+2.13×0.95×0.53 (1.80)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・龍泉窯系碗 I類・C群青銅・博	
SE-81	F-3	3.04×2.79×?	12C後半	白磁碗 IV類	
SE-82	H-4	0.74×0.70×0.48 (1.44) 1.96×1.66×1.30 (1.83)	12C末～13C中頃	七墻器・瓦器塊・軒瓦・白磁平底皿 IV類・龍 泉窯系碗 I類	
SK-83	I-2	1.31×1.05×1.31 (1.92)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・石包丁未製品	
SK-84	I-1	1.45×1.37×0.90 (2.00)	12C後半	白磁平底皿・I・II類・龍泉同安窯系碗 I類 ・石鍋	
SK-86	E-2	1.69×1.11+α×0.80 (2.22)	12C中～後半	白磁・上部器一部ヘテ切	
SK-89	G-4	3.50×0.85×0.61 (2.57)	弥生中期前半～中頃	括資料	
SK-91	H-2	1.09+α×1.61×0.86 (2.37)	11・12C	白磁碗 IV・V類	
SK-92	I-3	1.58×1.52×0.67 (2.59)	18C前半	近世陶磁一括	
SE-93	H-2	1.42×1.16×?	18・19C	福岡県内産陶器・軒丸瓦 (三巴)	
SK-94	H-1	0.88+α×0.62+α×?	12C中～後半	龍泉窯系碗 I類	
SD-95	H-1	0.51+α×0.31+α×0.33 (2.70)	古墳～奈良	瓶取手・獸骨	
SK-96	H-2	1.69×1.37×0.71 (2.20)	12C	白磁	
SE-97	D-2	10.98×0.67×1.69 (1.30)+0.80×0.76×0.38 (1.82) 4.00×3.37×1.66 (1.89)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・龍泉窯系碗 I類	
SK-98	G-5	1.59×1.55×1.69 (2.83)	明治初年	把前系陶磁器・福岡県内産陶器・軒丸瓦 (三 巴) 皇宋通寶	
SK-99	B-1	2.04+α×1.39+α×0.66 (2.50)	13C末～14C前半	ロハゲ白磁・龍泉窯系碗 I類・A群皿・博	
SD-100	F-1	0.54×0.40×0.17 (3.13)	13C後半～14C初	同安窯系平底皿 II類・白磁高台付皿 II類	
SD-101	F-1	0.36×0.24×0.42 (2.96)	12C中頃～後半	白磁小碗・A群甕・土師皿一部ヘテ切・瓦多 量	

博多Ⅸ

—博多遺跡群第30次調査の概要—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第149集

昭和62年3月31日

発行：福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2-10-29

印 刷：福博綜合印刷株式会社
